

有珠山

1 概況

火山活動は静穏な状態です。

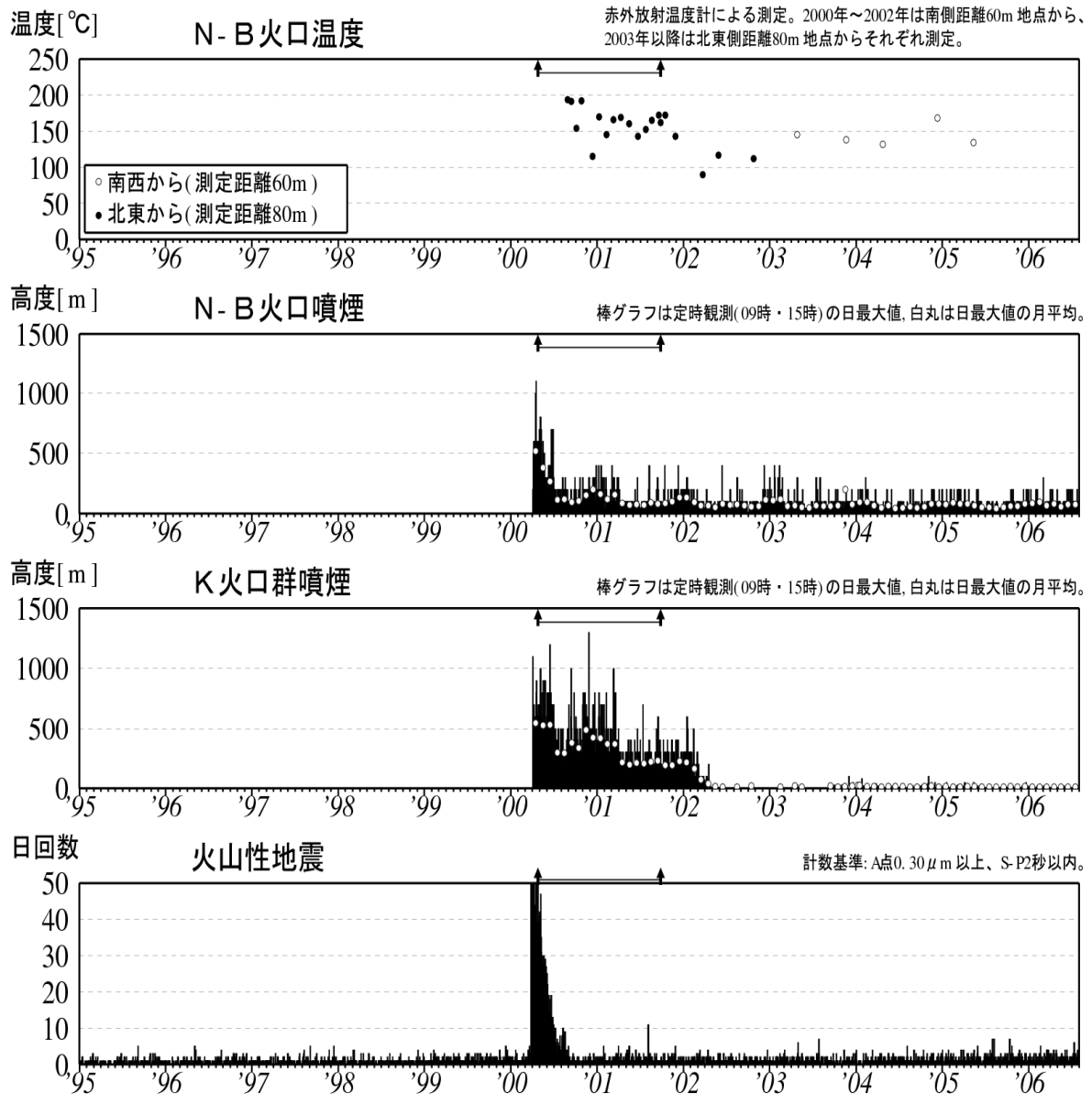


図1 有珠山 最近の火山活動経過図 (1995年1月～2006年7月)

↑印で挟まれた期間は2000年噴火活動期

本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用しています。(承認番号 平17総使、第503号)

2 噴煙および火口の状況

西山西麓（N）火口群の N-B 火口では、弱い噴気活動が続いており、噴気の高さは火口縁上おおむね 100m 以下で推移しました。金比羅山（K）火口群では、時折ごく弱い噴気が観測されました。その他、山頂火口原や昭和新山でも弱い噴気活動が続いていますが、これまでと比べて特段の変化は認められません。

25 日に北海道開発局の協力を得て上空からの観測を実施しました。西山西麓火口群および山頂火口原の噴気や地熱域の状況にこれまでと比べて特段の変化はありませんでした。赤外熱映像装置*による観測では、各火口の温度分布に変化は見られませんでした。以下、各火口等の状況について詳細を述べます。

【西山西麓（N）火口群】

N-B 火口では、火口底辺縁部から 10～30m 程度の白色噴気が上がっていました。噴出の勢いは弱く、これまでの状況と比べ、特に変化は認められませんでした。

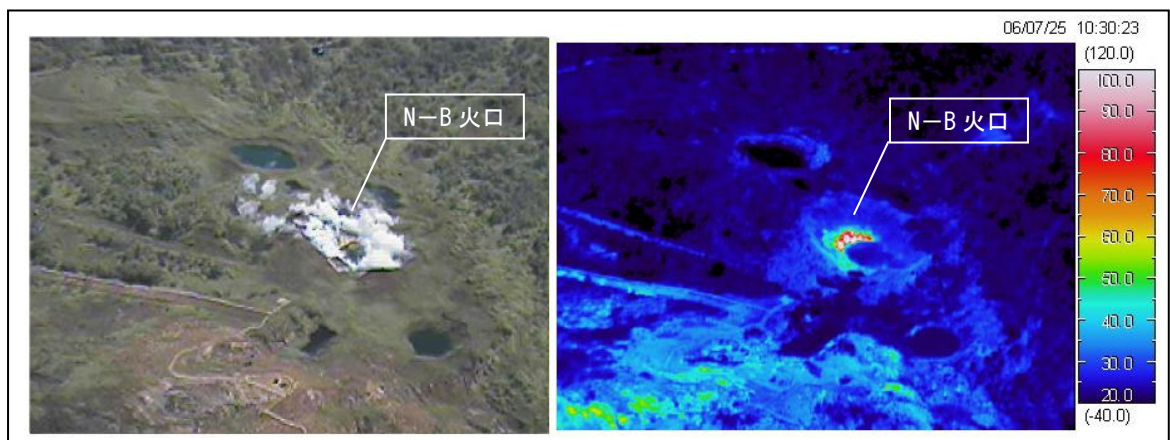


図2 有珠山 西側上空から撮影したN-B火口周辺の表面温度分布
（2006年7月25日、北海道開発局の協力による）

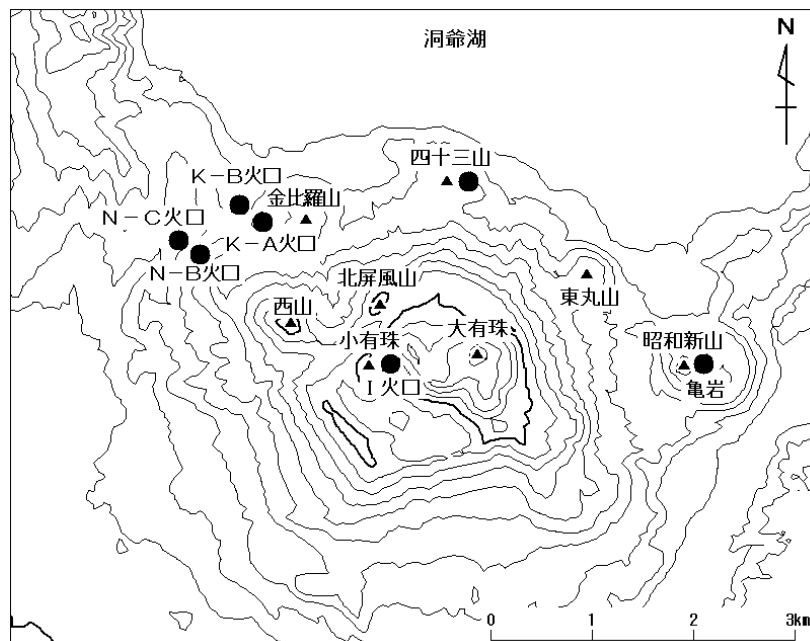


図3 有珠山 山頂周辺図

*赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

【金比羅山（K）火口群】

K-A、K-B 火口では噴気は認められず、周辺の状況もこれまでと比べ特に変化は認められませんでした。

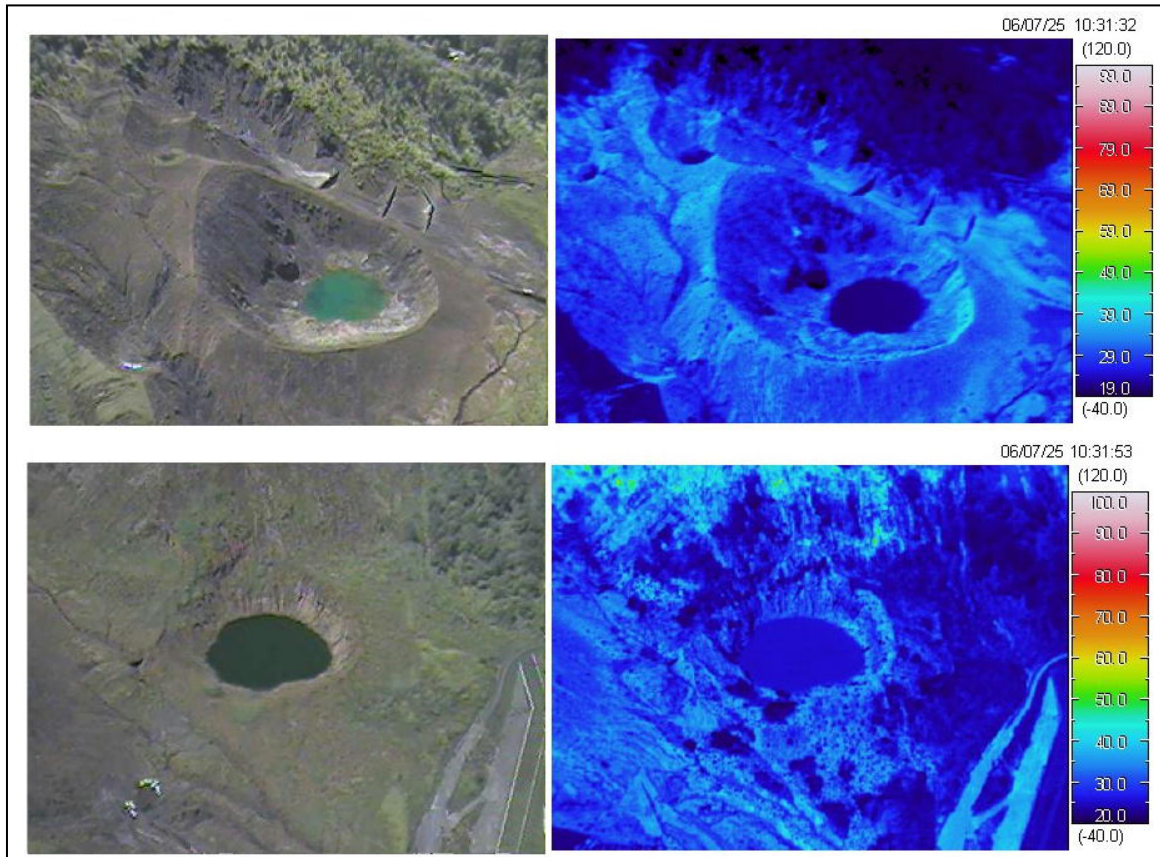


図 4 有珠山 金比羅山火口群の表面温度分布（2006 年 7 月 25 日、北海道開発局の協力による）
 上段：北側上空から撮影した K-A 火口周辺
 下段：東側上空から撮影した K-B 火口周辺

【山頂火口原】

I 火口及び小有珠南東麓の噴気孔から白色の噴気が 10～30m 程度上がっていました。これまでの状況と比較して、特に変化は認められませんでした。

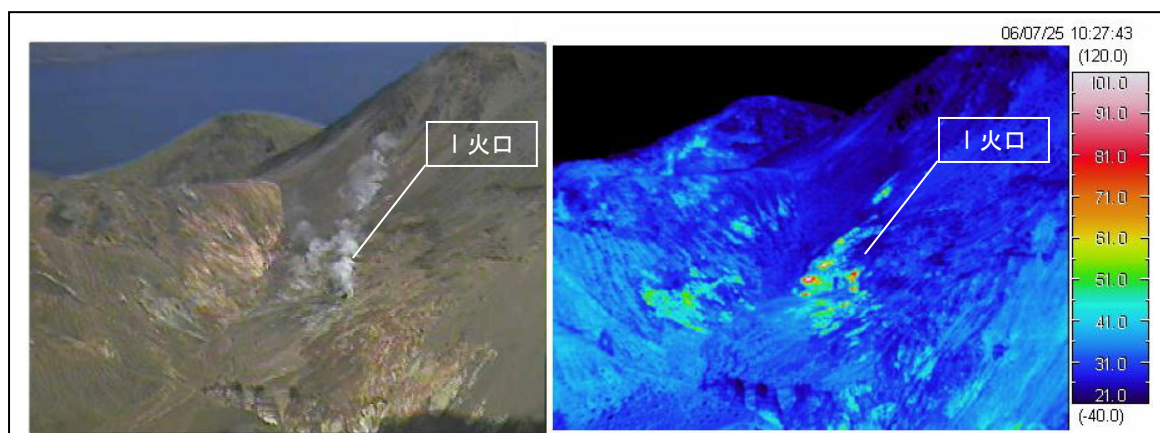


図 5 有珠山 南西側上空から撮影した山頂火口原の表面温度分布
 （2006 年 7 月 25 日、北海道開発局の協力による）

【昭和新山】

溶岩ドームの数箇所から、ごく弱い白色の噴気が認められました。

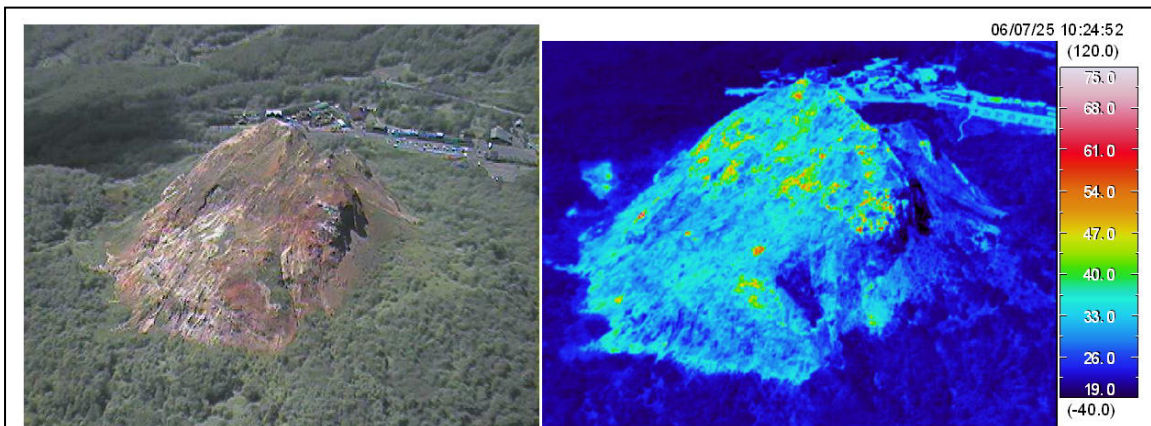


図6 有珠山 北側上空から撮影した昭和新山の表面温度分布 (2006年7月25日、北海道開発局の協力による)

3 地震および微動の発生状況

火山性地震は1日あたり0~6回と少ない状態で経過しました。震源はこれまでと同様に山頂部直下の浅い所(山頂から深さ約1.5km前後)に集中していました。

火山性微動は観測されませんでした。

表1 有珠山 地震・微動の月回数 (A点)

2005~2006年	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
地震回数	37	29	35	29	33	26	34	40	35	29	32	35
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

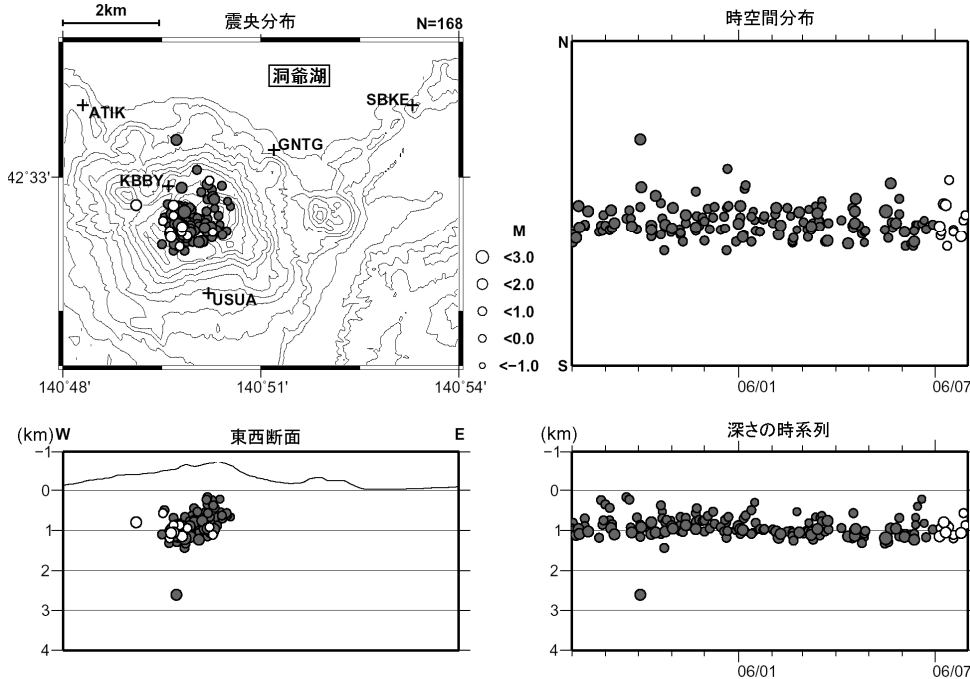


図7 有珠山の震源分布図 (丸印：震源 +印：地震観測点)

○印は今期間(2006年7月)に求まった震源を示しています。

●印は前期間までの11ヶ月間(2005年8月~2006年6月)に求まった震源を示しています。

前期間の震源は山頂部直下の浅い所(山頂から深さ約1.5km前後)に集中しており、今期間に求まった震源もこの領域内に分布しています。

4 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、火山活動の高まりを示すような変動は認められません。

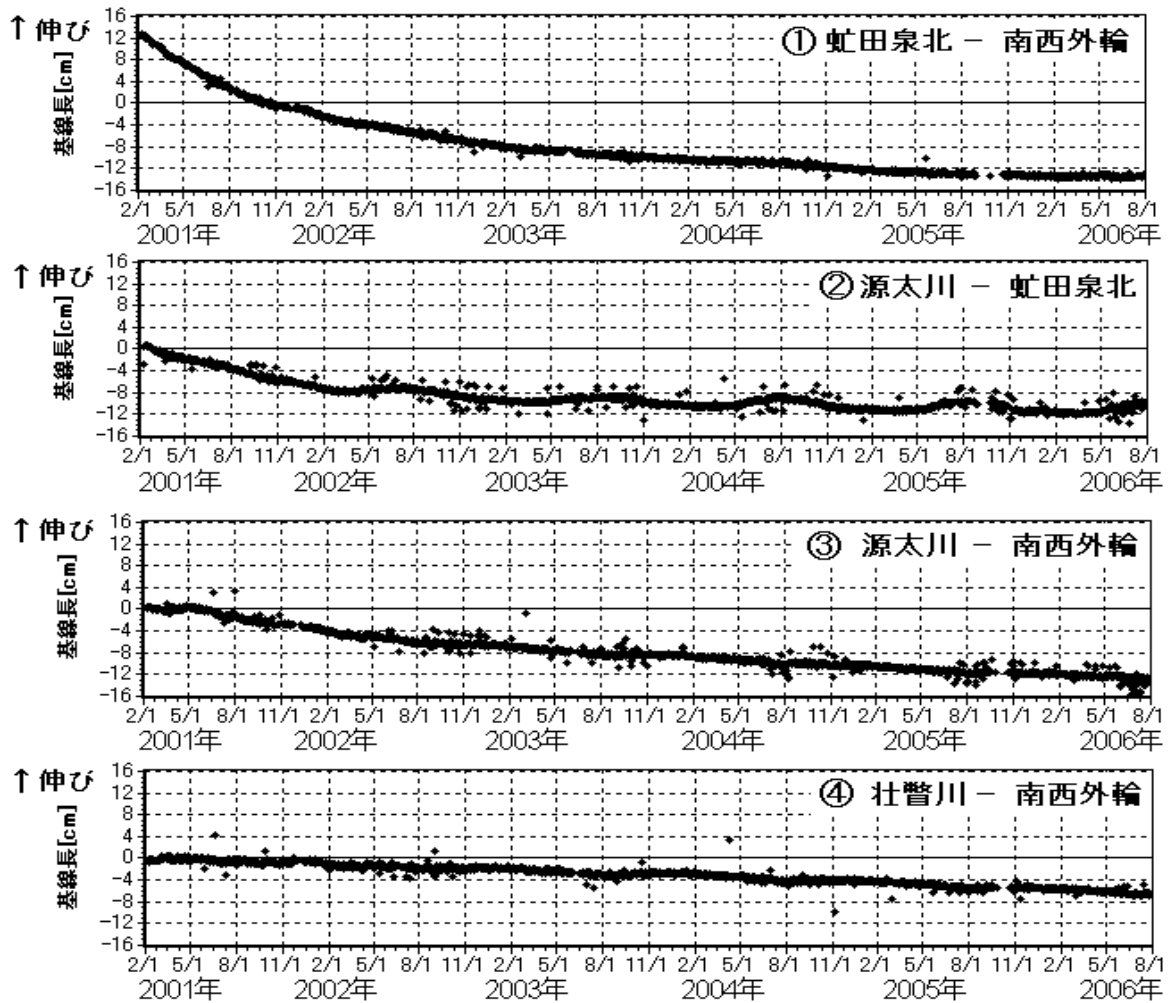


図 8 有珠山 基線長変化 (2001 年 2 月 9 日~2006 年 7 月 31 日) グラフの空白部分は欠測

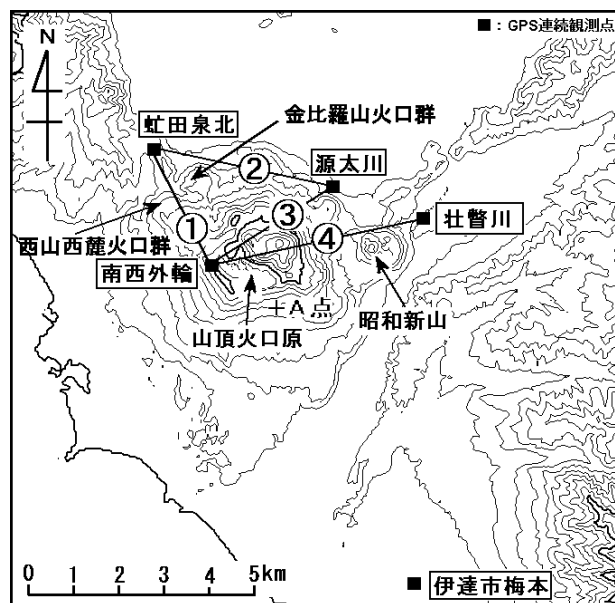


図 9 有珠山 GPS 観測点配置図